

コーディネーター研修

～子どもと大人がともに「集って楽しむ」～

令和6年6月7日(金):いわみーる401研修室



【説明】「『結集！しまねの子育て協働プロジェクト』について」

島根県教育庁社会教育課 社会教育主事 若槻 慎也

「結集！しまねの子育て協働プロジェクト」の目的

学校・家庭・地域が連携・協働しながら、地域総がかりで子どもの成長を支え、地域を創生する活動を推進する。

「結集！しまねの子育て協働プロジェクト」事業概要

学校支援・放課後支援・家庭教育支援⇒地域学校協働活動へ

「結集！」で描く子どもたち・地域の未来

●ありたい子どもたちの育ち

幼児期から中高生まで、子どもたちは地域の様々な人に支えられ、貴重な経験や体験を積み重ねて育っていきます。家庭に愛され、地域で大切にされて育った子どもは、ふるさとに愛着をもち、周りの人や自分を大切にできる心豊かでたくましい大人に成長していくと考えます。

●ありたい地域の姿

子どもたちと関わる活動は、地域住民にやりがいや、元気、笑顔を生み出します。関わる大人同士の繋がりは地域に魅力的な活動を生み出し地域の活性化に繋がると考えます。

『結集！しまねの子育て協働プロジェクト』大切にしたい4つのポイント

1. 多様な人々の参加
2. 対話（活動で出会った人の対話は活動に価値や広がりをもたせる）
3. 会議体の活性化（思いの共有）
4. コーディネートする人（人と人、学校と地域など）

（説明概要）



【講義】「しまねの社会教育で大切にしていること」（オンラインで講義）

島根大学大学院教育学研究科・講師 大野 公寛 氏

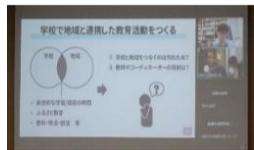
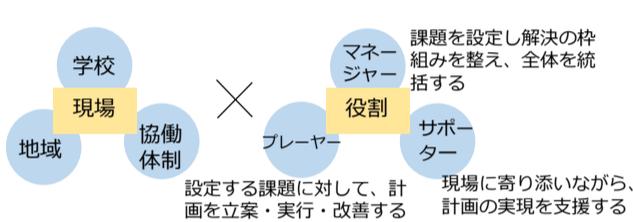
○自己紹介（近くの席3人で）

この場にどんな「コーディネーター」（CN）が集まっているかを知ろう！
今、「コーディネーター」として最も力をいれていることは？

●多様性…様々な現場で様々な活動に取り組むコーディネーターがいるということ

（地域学校協働活動推進員、魅力化コーディネーター、社会教育関係施設職員、地域連携を担当する教職員）

●立ち位置を意識する…自分がどの現場でどのようなコーディネート機能を担っているのかを意識してみると、役割の過不足や次のステップが見えてくる



出展：一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム編
「高校と地域をつなぐコーディネート機能の充実に向け」

●学校で地域と連携した教育活動をつくる

①学校と地域をつなぐのは何のため？

○学校教育を地域社会の真正な文脈と結び付け、変化の激しい未来社会を生きる子どもの生きて働く資質・能力を育むため。

②教師やコーディネーターの役割は？

○地域の教育資源とつなぎ、「子どもの主体的な学びを支援する伴走者」となる。

⇒社会教育の現場での地域の大人の多視点的学びが、学校における地域と連携した教育活動の質を間接的に向上させる可能性。（具体的に活動することで別の視点の活動を体験）
⇒「教え」と「学び」/学校教育と社会教育をつなぐコーディネート人材の可能性

●学校や地域で関係者を巻き込む

○子どもが生きる社会の中に社会関係資本がどれくらい蓄積されているかと、子どもの学校での教育達成とは関連する。

○生徒の資質・能力を高めるためには、学びの土壌（地域の学習環境）をどれだけ耕せるか。

「安全・安心の土壌」「多様性の土壌」「対話の土壌」「開かれた土壌」

○地域において、社会教育による「学び」を通じて人々の「つながり」や「かかわり」を作り出し、協力し合える関係としての土壌を耕しておくことが求められる。地域コミュニティの基盤となり、ひいては社会全体の基盤となる。

○学校にかかわる地域の大人の変化＝学びの重要性

○それを支え促す支援者＝社会教育の重要性

再帰的学び、かかわってどうするか
→気づきを促す、活動の意味の価値づけ
子どもたちとの出会いを沢山つくる
→出会いの中で新しい自分を見つける

●学校と地域の協働体制を構築・運営する

子どもや学校の目指す姿を構築し共有しつつ組織的に実践する

意思決定
学校運営協議会
コンソーシアム

教育実践

地域学校協働活動
（総合/総探・ふるさと教育・放課後等学習活動）

⇒経営と実践を意識的につなぐ

日々の実践から生成される知（経験・知識）を計画や方向性に反映させる

（講義資料より）

【実践発表】「想いをカタチに～地域と学校をマッチング～」

邑南町井原公民館 主事

藤井 祥平 氏

邑南町教育委員会学びのまち推進課

藤井 勇輝 氏

◎邑南町のコーディネーターについて

●地域コーディネーター 3名（3エリアに1名ずつ）

学校ニーズに対して、マクロ的（エリアごと）に地域とのマッチングを行い、学校と地域をつなげるコーディネートを行っている。

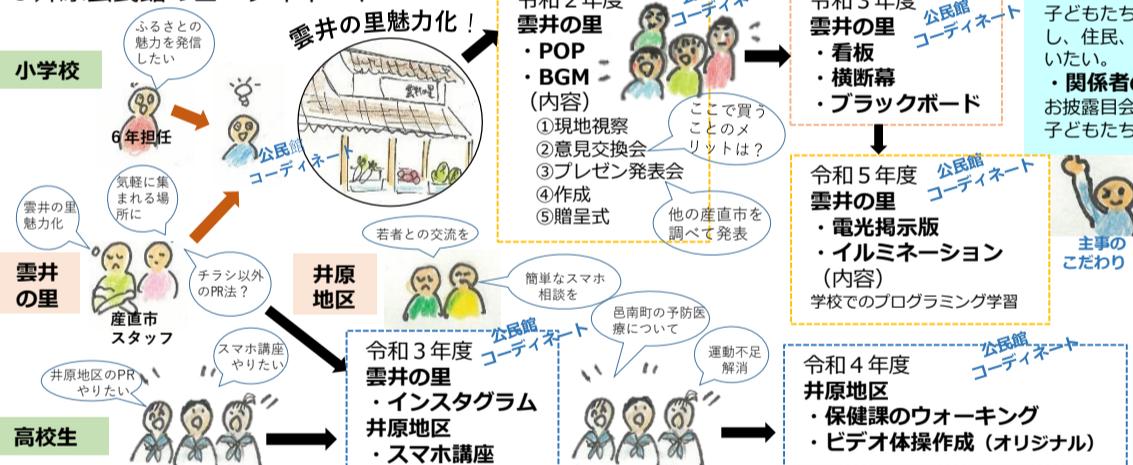
■公民館主事 12名（12地区毎に1名配置）

地域の課題やニーズ、地域住民の得意を常にリサーチし、学校ニーズとのマッチングや両者のWINWINをミクロ的に（地区や地域資源等をピックアップして）つくるつながりづくりを行っている。

◎邑南町の公民館について

3つのエリアに12公民館

◎井原公民館のコーディネート



●継続性を考えて実践

子どもたちの地域貢献活動を見える化し、住民、保護者に成長を感じてもらいたい。

●関係者の前等で成果発表を行う
お披露目会で直接反応を見ることで、子どもたちの自己有用感につなげる。

意識して取り組んでいること

- ・地域、学校、子どもがやりたいことを最優先
- ・継続性
- ・作られたビジョンに向かって全力で協力
- ・スピード感
- ・相談しやすい、さらやすい関係

（発表資料より）

【演習】「見つけよう！実践の第一歩!!」

<アイスブレイク> テレパシーじゃんけん他、自己紹介



<フリットーク>

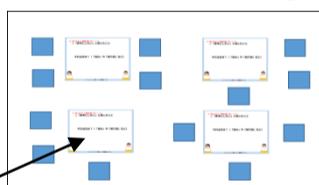
講義・実践発表をふまえて「参考にしたい」と感じたこと、「それはなぜ？」（悩みや困り感など）について、思いを交流する。

参考にしたいこと（出た意見）

- ・継続性
- ・関りの深さが変化の度合いに
- ・意思決定と教育実践の接続
- ・関係者を巻き込む
- ・相談しやすい、さらやすい関係性づくり
- ・子どものやりたいことを実現
- ・学校と地域が連携した教育活動

<ラベルワーク>

メンバーの「困り感」「悩み」に対して、参考となるような「うまくいった事例」や「心がけていること」「こうしてはどうか」などのアドバイスをラベルに書き紹介し合う。



<まとめ>

「明日から実践してみたいこと」についてカード（名刺大）に記入する。メンバーに応援メッセージをカードに書いてもらう。

「困り感」「悩み」に対するアドバイス

- ・子どものやりたいがなかなか引き出せない
子どもにまかせる 大人が信頼される 最初はこちらから提案
- ・地域と学校の関わる場をつくる
- ・何のために何をやるのかわからなくなる
目的を持つ 細分化して見える化 関係者が定期的にミーティング
- ・丸投げ
打ち合わせを定例化 学校と地域が親しくなる機会を 役割を明確に
- ・継続するには
関わる人が楽しく参画 成果が見える ○○だよりをつくる



【全体講評】

島根大学大学院教育学研究科・講師 大野 公寛 氏

今回の研修は、多様な方が集っている。悩みや現状を持ち寄り、現場を越えて学びあうことが大事だ。

邑南町の事例発表について。子どもたちとスタッフの意見交換会は、子どもたちからするどい質問も出ていた。子どもにとっては学びの場であり、大人にも刺激になった。また継続性のある事業が行われていた。活動が生まれた最初のところは興味深い。学校と地域、両者の思いをキャッチしていた。学校の学びやニーズを、よりリアルな生活と結びつけて

いた。地域側は、活動の悩みを新しい視点で解決していき、地域課題をしようがないとあきらめるのではなく、学習課題へ結びつけた。

コーディネーターの活動は、黒子、裏方で支えていくイメージだが、環境を醸成する、黒子になりながら基盤を作っている意識をもってほしい。活動が表に出ることはなかなかないが、関係者や行政などへ打ち出していき、可視化できるのでは考えることも必要か。（一部引用）

【アンケート】（一部抜粋）

- ・自身の立ち位置を意識しながら参加したことで、色々な意見や事例を吸収できた。その一方でアウトプットの機会が少し足りなかった。
- ・大野先生の話は、毎回わかりやすく、今後の事業についてのヒントをいただいた。
- ・実践発表は、熱量が伝わり刺激になり、高校とのCNについても参考になった。
- ・最後の演習がとても楽しく、同じグループの皆さんからエールをもらえ満足。
- ・演習の時間はとても楽しく、いろんな話が出来た。それぞれ立場は少しずつ違って悩み

- も同じではないが、大変なことも苦しいことも笑って言い合えるところが良かった。
- ・学校で地域と連携した教育活動をつくる上での視点を整理することができた。
- ・井原公民館の実践発表が大変すばらしかった。子どもや地域の方々が生き生きと取り組んでいる熱や温かさがストレートに伝わってきた。また、社会教育で大切にしているポイントがちりばめられている発表でマネしたいことがたくさんあった。
- ・大野先生のお話が、自分の中でとてもタイムリーな内容で参考になった。